

子どもの生きがい



晶 中 徳 子

おとなにとって、「生きがい」とは、生きる価値・目的など、その人がよりよく生きるための行動の目標となるものであろう。

子どもとりわけ、幼児にとつての「生きがい」が何であるのか。私たちおとなは、それを、どのように考えたらよいのであろうか。

母親が、自分の幼いころの体験を、四歳の子どもに話している。

子ども 「そのとき、ぼく、まだ、生まれていなかった？」

母親 「そうよ」

子ども 「そのときは、まだちっちゃくて、ママのおなかの中にいた？」

母親 「そうねえ……。おなかの中にもいなかったかな……」

子ども 「ちっちゃくて、いたよ!!」

母親は、子どもの真剣な表情に、何と答えてよいのか、一瞬とまどうが、

母親 「そうね。きっと、小さくて、いたのかもしれないわね」

子どもは、やっと安心したような顔で、笑う。

この母親は、なぜ、このとき困ったのであろうか。母親—おとながとらえている客観的事実と、子どものとらえている世界とのちがいが、ズレにとまどったのである。子どものこのような考え方を「自己中心性」とみることもできる。子どもにとつては、自己の存在しない世界など、考えられないことであり、自己があつてはじめて世界が存在するのであろう。

しかし、このことは⁽¹⁾「子どもが、関係的存在である」ことのあかしでは、ないだろうか。

子どもは、子どもであるとともに、父母があつて生存し始め、父や母—おとなとの関係で存在している。おとなによつて「子どもは、保護されなければ、存在することはできない」が、

子どもとの関係が発展することによって、おとなの関係のしかたも変わり、おとなのなう社会関係の変革も可能になる。

子どもは、将来、社会において重要な役割をになうおとなになる人として、現在、おとなとの関係で存在することに価値がある。

私たちおとなが、「子どもの生きがい」を考えようとするとき、このように「子どもが関係的存在である」ことを認識する必要がある。

子どもは、おとなのように、行為の動機と、その行為の結果との関係で、認識してふるまうことが困難である。それゆえ、私たちおとなには、子どもの「生きがい」がなんであるのかは、わからない。ただ、私たちおとなにとらえられるものは、子どもが、生活の中で「生き生き」としているかどうかである。子どもが、自己、人、物との関係の発展の過程で、「生き生き」としているかどうかである。

では、どうしたら、子どもが「生き生き」としている姿を、とらえることができるであろうか。

子どもに日ごろから接している人で、「自分は、子どもの『生き生き』している姿に、毎日のように出会っている」という人がいる。あるいは、「元氣よく遊べる子はよいが、ど

うも遊べない子がいる。そういう子は、あまり、『生き生き』していない」とみる幼児教育者もいる。

子どもの「生き生き」している姿に、毎日出会っていると思う人は、子どもとの生活を楽しみ、子どもの「生き生き」した姿が、自己の「生きがい」にもなっているのである。

その人は、子どもとの関係で、子どもが「生き生き」する瞬間を体験している。それが、その人の喜びの源泉にもなっているのか、どのような関係の変化によって、それが生まれるのかは、その人にとってあまり問題とならず、「子どもたちは、ほら、こんなに、『生き生き』としています」と、確信をもっている。

「元氣に遊べない子がいる」とみる人は、子どもから離れて、子どもを観察している人であろう。あるいは、自分は、子どもから離れているつもりではなく、子どもをなんとか、元氣よく、遊ばせたいと思っているが、子どもを観察しようとすると、気がつかずに、子どもから離れてしまう人であろう。離れて子どもをみると、「どうも、元氣に遊べない子が目立つ。困ったことだ」と思えたりする。

また、ほかに、子どもと関係をにないながら、子どもが、「生き生き」してくるのを、とらえることのできる人がいる。

次の例について考えてみよう。

妹 M(二歳)は、兄 K(四歳)にぬいぐるみのおもちゃをとりあげられて、泣きながら母に近づく。

母 「Mちゃんは、Kちゃんがワンワン(ぬいぐるみ)をもつていってしまったので、悲しくて泣いているのね」

妹 うんうんとうなずきながら泣く。

母 「とっても悲しいので、涙がいつまでもでるのね」
妹 ちらっと母の顔を見て、少し恥ずかしそうにするが、またうえーんと泣く。

母 「あのワンワンは、お兄ちゃんのじゃない、Mちゃんのだと思っているのかな」

妹 うんうんとうなずき、まだ泣こうとして声をあげる。

兄 母の話しているのが聞こえるので、ときどき、母と妹の方を見ながら、クマやイヌのぬいぐるみの動物を全部集めて、大きな箱の汽車にのせている。

母 「Mちゃんは、お兄ちゃんが、一人であんなにたくさん、ぬいぐるみの動物たちをもたなくたっていいのに、と思っているのかな」

妹 少しずつ泣きやんで、次に母が、何をいいたすかというような顔になる。

兄 「だって、ぼくいま、汽車ごっこしているから、みんな

いるんだもの」

母 「Mちゃんは、お兄ちゃんが、何か始めたなど思っている……」

妹 兄の方を見て笑う。
母 「Mちゃんは、お兄ちゃんと、汽車ごっこしたいなあーと思ってきたの……」

妹 笑いながら、うんうんとうなずく。
母 「さあ、それじゃあお兄ちゃん、Mちゃんもワンワンとお客さんになるから、入れてください」

母は、妹をつれて、兄の方へ近づく。

兄 「じゃあ、Mちゃんは、うしろの箱にのって。お客さんだから」

妹は嬉しそうにうしろの箱に乗り、兄と遊びはじめる。母は、少し離れて様子を見る。

この例で、母のどっている役割について考えてみる。

母は、はじめ下の子(妹)との関係で、下の子の気持ちを受けられる。それは同時に、上の子(兄)へ下の子の気持ちを伝える、という間接的な働きかけとなっており、上の子にもそれがとらえられる。下の子は、母に自分の気持ちを受けいれられたことで、少しずつかわってくる。母が下の子と上の子

の変化をとらえる。(関係発展の体験と関係の認識)

次に、母は状況を明らかにすることによって、今、ここで
の関係が新しく展開するように、下の子へ働きかけ、さらに
下の子をとおして、上の子へも働きかける。母の働きかけに
よって、上の子と下の子の関係が発展する。(関係操作によ
る関係の発展)

子ども「生き生き」した姿をとらえるということは、子
どもと関係をにないながら、その関係が発展していく過程
を、認識できることである。関係の発展を、そのうちにはい
りこんで、単に体験しているだけでは、関係発展のための技
法が生み出されない。関係を認識して、その関係が発展でき
るように、関係を操作することができなければならない。子
どもから離れて、自分ときりはなして、子どもを見ているの
ではなく(離れて見ているように見えても、関係の発展にと
って必要なら、いつでも近づけるようにしている場合もあ
る)、子どもとの関係に主体的にかかわることによって、関
係の操作が可能になる。関係操作によって、さらに関係のあ
り方が変わることのなかで、新しい関係の発展がもたらされ
る。子どもはまた、「生き生き」としてくるであろ
う。

「子どもは関係的存在である」ことによって、子どもと関
係をになうおとなには、子どもが「生き生き」しているこ

と、「生き生き」できることに關して、責任がある。

子どもと関係をになっている人が「この子は、元氣よく遊
べない子だ」「生氣のない子だ」というとき、いまここで、
子どもとの関係においてその人は、その子どもが「元氣よく
遊べない」ことの責任をになわなければならない。

「子どもの生きがい」は、子どもと関係をになうおとなが、
未来の社会をつくる子どもとの関係の發展を目指して、現在
の子どもとの関係における責任を果たそうとするとき、子ど
もが「生き生き」としてくることによって、とらえられるも
のなのではないだろうか。

(立教女学院短大、幼児教育科)

引用・参考文献

- (1)・(2) 松村康平編著 「児童臨床学」

一体系児童学研究—光生館

(昭和44年)

ほか 松村康平・岩村佳代子共著 「教育相談と心理劇」

現代社 (昭和45年)